戯曲

「浮遊惑星は銀河を彷徨う」

作　ササキタツオ

《登場人物》

男（２８）会社員

女（２８）ハンドメイド作家

《本編》

■浮遊惑星

白いワイシャツを着た男と女がいる。
二人はそれぞれ自由に歩いている。
女は清楚。
男はネクタイを緩めている。

二人は、行く当てもなく、
この宇宙を彷徨っているのだ。

ここは銀河系のどこか。

人は惑星のようである。

男「浮遊惑星。銀河系を浮遊する惑星のこと。
浮遊する惑星規模の質量を持った天体」

女「浮遊惑星。なんらかの理由で恒星系から
はじき出された存在。銀河の中を漂う孤独
な存在」

男「浮遊惑星。銀河をひたすら漂う」

女「浮遊惑星。属する先を失った、悲しい存在。あなたは何を求めて彷徨うの？」

女、立ち止まって、男を見る。

男、女の視線に気づき、立ち止まって女を見る。

■愛とは？

男と女、立ち止まったまま。

空を見上げる。

そこには星空が広がっている。

女「愛とは何だろうか？」

女「愛し合うとは何だろうか？」

女「あなたと抱き合えば、わかると思っていた、愛についての世界の真相」

女「でも、いまだにわからない」

女「愛とは、この世界に存在しているようで、あるようでないものなのかもしれない」

女「でも、だとしたら、私は一体何を信じたらいいんだろう？」

男「愛を信じている。愛の実感がある」

男「だけど、それは一瞬の感触で。後は虚しさばかりが漂う」

男「なんだろうこの感覚。そこにあると見えたものは幻のようで……」

男「でも、確かにあると思えるもので、その

実感を得たくて、何度も何度も、確かめて
しまうのだけれど、つかめない……」

■抱き合う

孤独な空間の中で、
男と女、身を寄せ合う。

男「なあ」
女「ん？」
男「いや……」
女「なに？」
男「なんでも」
女「抱いて」

男、女をそっと抱きしめる。

男「うん」
女「もっとしっかり」
男「うん」

男、女を強く抱きしめる。

女「感じてる？」

男「ああ……」

女「変態」

男「え……」

女「ウソ！」

男「なんだよ」

女「もっと強く」

男「こう？」

女「違う」

男「こうかな？」

女「ちょっと違う」

男「じゃあ……こうか？」

抱きしめ方を検討する男。

男の腕にもぐる女。

最適な状態を探る。

女「いいかも」

男「これでいい？」
女「安心するなあ」
男「俺も」

間。

女「ずっとこのままがいい」

間。

男「ずっとは無理だよ」

間。

女「ずっとがいい」

間。

男「ずっとか……」
女「うん。ずっと……」

抱き合う時間は永遠には満たない。

■離れる朝

男と女、ゆっくりと離れる。

女「行くの？」

男「行きたくないけど」

女「そっか」

男「うん」

女「今度は、いつ会える？」

男「……連絡する」

女「……わかった」

男と女、手をつないで歩き出す。

女「午前5時。明け方の藍色の空を見つめる。駅まで彼を見送る。ずっと手をつないでいたけれど無理な事はわかっている。でも、彼の手から伝わってくるぬくもりは、ずっと、ずっと、を願っているように感じた」

男「また」

女「バイバイ」

女、去る。

■朝焼け

男、一人、電車に揺られる。

男「一人暮らしの家に帰る電車の中。車窓から見える朝焼けがいやに眩しい。俺は、目を閉じる。彼女の残像が映る。彼女の姿も存在も俺には眩しい」

男「俺の事を愛していると言った、彼女の事

を、俺は本当に大事にできているだろうか。俺は、自分の存在のふがいなさを埋めるために彼女を愛しているフリをしているのではないか。彼女を得ることで自分の不充足感を満たしているのではないか。ああ、嫌な発想にとりつかれる。もっと、自分を信じろ。ああ。でも……。だけど。ああ、彼女は俺には眩し過ぎる……」

■男の仕事

男、ネクタイを締めて。

頭を下げる。

男「すみませんでした」

男「本当に申し訳ございません」

男「誠に申し訳ございません」

男「以後このような事が無いよう善処いたし

ます。この度は誠に申し訳ございませんでした！」

男、空仰ぎ、ネクタイを緩める。

男「他人のミスをなぜ自分が謝るのか、理解ができない。それが【仕事】と言われれば。それまでなのだが。俺は、あと何年この仕事をするのだろうか、いや、ずっと、この仕事を続けるのだろうか。ずっとこのまま俺は、俺を続けていくのだろうか……」

男、去る。

■女の仕事

女、やってくる。

女「好きなものは好き。嫌いなものは無視する。私は私の好きなように生きる。そう決めてから、心が楽になった。収入は少ない

けれど、今日も一つ売れた。友達はハンドメイド作家なんて無理だって笑ったけれど。私は地道に頑張っている。心を壊して、働くより、ずっといい。そう気づけたから。友達には現実を見なよって言われたけど。私は私らしくありたいだけなのだ」

■会いたかった

男、やってくる。

立ち止まり、女を見る。

女、男に気づく。

女「あれ？」

男「会いたくて」

女「連絡は？」

男「いや」

女「そっか」

男「ごめん。忙しかった？」

女「ううん。大丈夫」

男、女を抱きしめる。

女、男を抱きしめる。

男「会いたかった」

女「何か、あった？」

男「別に」

女「ウソ」

男「話すほどの事じゃ」

女「そっか。じゃあ、聞かない」

男「俺、もうダメかも……」

女「今日は弱気だね」

男「ごめん」

女「ダメなんてこと、ないよ」

手をつなぐ男と女。

二人で空を見上げる。

男と女は次第に距離を開けていく。

つないだ手が徐々に離れていく……。

女「このひとの事を、私はどれだけ理解できているのだろう……。時々、わからなくなる……わからなくなって、怖くなる」

男「俺は、彼女の事を羨ましく思っているのだろうか……自由。自由。自由。俺にはないモノを持っている、彼女はすごく眩しい……眩しくて、時々つらい」

女「私はあなたのこと。愛していると言いたい。伝えたい。伝えたいけどうまく伝わっている実感がない。あなたはいつもどこか違うところを向いている気がするから」

男「俺は彼女を愛している。彼女のためなら、心を殺しても、働くことを優先する。彼女のためなら、どんなに嫌な事だって耐えてみせる。俺は、俺を強く持ちたいと思って

いた。彼女のためなら……彼女のためなら」

女「愛って何だろう」

男「生きるって何だろう」

男と女、離れる。

二人、彷徨う。

■最近、生きてる？

男と女、少し離れた距離をとって、

向き合う。

男「最近、生きてる？」

女「え？」

男「仕事、辞めてから」

女「生きてる。むしろ」

男「……そっか」

女「なんで……？」

男「……いや。そうかなって」
女「そう？」
男「生き生きしてるかなって」
女「……そっちは？」

男、考えて、意を決して。

男「こっちは、生きてないかも」
女「え……？」
男「もしかしたら、むしろ死んでるのかも」
女「ウソ？」
男「ホント」
女「ホントなの？」
男「気づかないうちに死んでたり……」
女「それは怖いよ……」
男「ちょっとね」

間。

女「じゃあ、おいしもの食べよ」

男「え？」
女「それか、面白い映画見るとか」
男「ああ……」
女「それか……（考える）」
男「いや、大丈夫……」
女「そう？」
男「うん」

男は女を見つめる。

女も男を見つめる。

女「無理してない？」
男「無理しないと、だろ？」
女「そんなことないよ」
男「いや。そうだよ」
女「え……？」
男「俺には真似できない。仕事辞めるとか」
女「なんで？」
男「わからない。でも、無理なんだ。人生、

逃げたらいけないって」
女「逃げたの？　私？」
男「あ。いや……」
女「まあ、逃げたのかもね」
男「……」
女「でも、それはダメなことなの？」
男「……いや……でも」
女「真面目だね」
男「だって……」
女「真面目過ぎ」
男「生きていけないだろ……」
女「生きていけるよ」
男「……」

男、俯く。言葉なく。
沈黙。

■逃げること
女、男から離れて、空を仰ぐ。

女「逃げることにしたのは、間違いじゃない。生きるのを辞めようって何度も思った。けど、生きることから逃げたらいけないと思った。だから、仕事から逃げた。仕事を辞めた。社会の一般的なレールから脱線した。私はどこにも属さない、私の道を選んだだけだ」

女、男を見る。

女「そのことを彼はわかっていない。わかってくれていると思っていたのに。わかっていなかった……」

女、去る。

■男の仕事

男、ネクタイを締める。

頭を下げる男。

男「この度は誠に申し訳ございませんでした！」

深々と頭を下げ続ける。

男「申し訳ございません。申し訳ございません。申し訳ございません」

顔を上げる男、ネクタイを引っ張って自分の首を絞める。

■男は仕事を辞める

その場に倒れる男。

男「お世話になりました……」

男、起き上がり、ネクタイを外す。

再び、その場に崩れる、男。

男「俺は、体が動かなくなって始めて自分の置かれている状況に気づいた。このままでは、死ぬ。本当に死んでしまう。でも、俺はまだ自分の人生に、自分で決着をつける勇気は持てなかった。だから、結局、自分の期待を自分で裏切って。逃げた。仕事を辞めた。彼女を支えることも。もうできない。ふがいなさを感じた。俺はもうダメだ。ダメな人間なんだ」

男、動けないままで……。

■女は男を支える。

女がやってくる。

女、動けない男の背中をさする。

男「……ごめん」

女「ううん」

男「……限界だった」
女「うん」
男「……俺、仕事、やめた」
女「うん」
男「……反対、しないの？」
女「うん」
男「……なんで？」
女「だって。気持ち、わかるから」
男「……わからないよ」

女の動きが止まる。

男が女から離れる。

男「ごめん……」

女「うん。わかってる」
男「わかってる？」
女「うん。そんなつもりじゃないこと」
男「……わかってない」

女「え……？」
男「俺には眩しすぎるんだ……俺、もう」
女「ダメなんかじゃない」

男、その場に縮こまる。

男「（声が擦り切れるまで泣き叫ぶ）うわっあああああっーーーーーー……」

■二人の心の距離

男の周りを回る女。

女「私たちはいつの間にか、遠くなっていた。
星と星がすれ違うように。気づいたら離ればなれになっていた……」

女「私たちは愛を信じるには不器用すぎた」

女、空を見上げる。

女「浮遊惑星はどこの銀河にも属さず自由に宇宙を駆け巡る。漂う。さまよう。さまよい続ける。それはとても孤独な事なのかもしれない……」

女「私もあなたも。もしかしたらそんな浮遊惑星かもしれない。社会からはじき出された孤独な存在。でも、だからって、一人でいることを選んでいいの？」

女「私たちは人間だ」

女、男を見る。

女「あなたがいること。あなたと生きることを選択すること。それが、生きる実感、愛の証明だというのなら、私は、あなたと共に歩いていきたい。星と星は離れていて交わらないけど、私たち人間は、言葉を重ねて、お互いを引き寄せることができる。一

緒に歩いてくことができる……だから」

女、手をのばし、男の肩に触れる。

男、顔を上げ、女を見る。

見つめ合う二人。

女、優しく、うなずく。

男「こんな、俺でもいいのか……？」

女「生きるための、リハビリ、しよ」

女が男の手を取り。

立ち上がる男、女を見つめる。

そして、

手をつないで、空を見つめる男と女。

そこには広大な宇宙が広がっている。

女「あなたがいて。私がいる。私たちがある」

男「君がいて。俺がいる。俺たちがある」

女「私たちは、世界の片隅で」

男「お互いを見つけ合って」

女「認め合って」

男「確かめ合って」

女「一緒に歩いていく」

男「そこに、光が見えるのか……」

女「そこに光があると思うよ」

女と男、身を寄せ合って、
再度、空を見上げる。

そこに、空から眩い光が差し込んで。

二人のシルエットはまるで宇宙に浮かぶ惑星のようで……。

（終）